

# 古いアルバート街の物語

脚本 アレクセイ・アルブゾフ

訳 和田豊

脚色 永妻晃

クリスト、電話をしている。

「あ、もしもし……あたし、マリリン・モンロー、そう  
モンロー・ウォークのモンロ……あなた、可哀想なバリ  
ヤースニコフから借りたお金返しなさいよ。返さないと  
あたしのケネディがただじゃおかないわよ」

クリスト、電話を切と、

「バリヤース、これでいいか？ 貸すなら、あげたつもりで貸しなよ」

電話のベル。

クリスト「お、電話だ……はい、こちらシラノ・ド・ベルジュ  
ラック……違います！ 朝からずっと鳴らなかつたの  
に、やっと鳴ったと思ったら、洗濯屋と間違いやがった。

かわくだ

おい、バリヤース明日からボルガ河下りでカスピ海まで  
行つて、またモスクワへ帰つて来る。船室は特等だ。道  
中きれいな景色を眺め、印象を残すと言うことだ……そ  
うか、あんたは今年で七十……見るべきものはみんな見  
た。印象なんかたくさんか……マイエルホリドの芝居に  
も出た。シベリア鉄道の試運転にも乗った。ついには、  
美術学校を出て人形作りになった。戦前のあんたの作品  
は、パリの新聞に批評が出るほどだ。『すばらしいバリ  
ヤースニコフの風刺的人形』、それから何回か結婚に失  
敗して、何度も絶望的になった。君には仕事が必要なん  
だ。『人形師は仕事をしながら精神統一をするんだ』。と  
いつもいつているがバリヤース、あんたは精神統一が必  
要なんだ。それにはボルガ河下りがよく効くということ  
なんだ。七十だ。隠居したほうがいいよ。何？ 『だま  
れ！ かのゲーテ曰く、“人間年をとつたら、若い時  
以上仕事をせよ”か？ じゃ、河下りはキャンセル

か？ そうだ、こうしよう！ 船の上で仕事を始める。  
うちの劇団の支配人が天才的なアイデアを思いついた  
んだ。『美しきヘレーネ』を人形劇でやる。え？ どう  
だい、あんたが一生女を求め、ついに得られなかったも  
の。それをみんな『美しきヘレーネ』に注ぎ込む！ ま  
まだお前さんは注文受けたわけぢやないんだろが？  
えッ、『笑わせんなってんだ。俺に頼むに決まっている  
だろ』……さて、どうかな？ ……おっ、玄関のベルだ、  
誰か来たか？ 人が来ると言うことはいいことだ。まだ  
忘れられていないということだからな……はいはい、今  
行きますよ……ええ、分かっているよ。良い感じの奴し  
かいれないよ」

クリスト、玄関へ、

クリスト、帰って来て、

「あんたの娘だ」

クジマー・バリエースニコフが入って来る。

クジマー「(挑発的に) ちわ」

クリスト「(用心深く) どうだその後の人生は？」

クジマー「(持ち物を遠いソファに投げつける) まあね！」

クジマー、黙って部屋の中を歩き回る。

クリスト「クジマー、坐れ、そんなうろろしてないで」

クジマー「それより、クリストおじさん、どうしてあんな人間

とつき合っているのか説明してもらいたいね」

クリスト「それで、何しに来た？」

クジマー「(攻撃的に) 今朝、撮影所に呼び出された。アニメ

ーション映画をやらないかと言われた。もちろんオーケ

ー……しかし、何となく気になるんで、どうして学生の

分際でそんな光栄なことを頼まれるのかと聞いたたら、お

やじの推薦だという！ 昨日は昨日で、五十ルーブルの

電報為替が来た。差出人は、『銀の森のロビンソン・クルーソー』。この善人面してひとをバカにする権利がどこにあるんだ？ いったいあの男は自分が誰だと思っ  
ているんだ？」

クリスト「バリエースはお前の親父だ」

クジマー「ヘッ、いい年こいて悪ふざけばかり」

クリスト「クジマー、死んだお前のお母さんをふくめ、かつて

バリエースの妻たちは、みんな彼を捨てたんだ」

クジマー「そうさせたのは自分だろ……おやじは誰も必要じゃ  
なかったんだ。彼の人形が生きた人間の身代わりだった

んだ」

クリスト「よくわかった！ バリエースは役立たずならお前

は何だ？ これはお前のおやじの伝言として聞いてく

れ」

クジマー「おやじは何て？」

クリスト『職選びだって、想像力が乏しいから俺の二番煎じ

だ。あの真似っこアマ』

クジマー「おやじに伝えてくれ！」

クリスト「言ってみろ」

クジマー「絶対おやじより偉くなってみせる！ おやじの出演

はもう終わったんだ。劇団だってバリエースなんか、も

う用はないって言ってるんだ」

クリスト「何の話だ？」

クジマー『『美しきヘレーネ』の人形制作の担当は、ペーチキ  
ンに決まったんだ」

クリスト「誰が言った？」

クジマー「劇団の皆だ！」

クリスト「だからどうした？ そんな仕事をやるにはバリエー

スは上等過ぎるんだよ」

クジマー、バリヤースの部屋に向かい。

クジマー「おやじ殿、例の五十ルーブルはロビンソン・クルー

ソー氏に返しておくぜ！」

クジマー、去る。

バリヤース、出て来る。

クリスト「聞いてたか？ お前さんに似てきたな……そう、ペ

ーチキンだとき……確かにペーチキンはお前さんが育

てた奴だ。これが年をとると言うことだ。あんたはもは

や用がないというわけだ……そう、芸術家としての生命

が終わったということだ、『おお、雨よ、風よ、稲妻よ、

いずれわしにとっては吾子ではない、この白髪頭を打ち

砕け！』『リヤ王よ、あなたのお怒りはごもつとも！』

……なに？ 『これが運命でもんだ、おしまいだ』、な

にバカを言ってるんだ。こりゃあ絶対、精神統一が必要

だ。あの、でかいボルガ河で太陽の光を浴びれば、

考えもかわるよ。自然に帰れた。お前は天才じゃないか

……じゃ、ちよつとうちへ帰らなきや……野暮用やぼようがある

んだよ。……『帰るな』といわれてものな……『今日は

休暇の初日だ……お前がいないとさびしい』……がまん

しろ！」

クリスト、何も言わずに出て行く風。

(クリスト、ストップモーション後バリヤー

スに変身)

バリヤース「おい、クリスト！」

バリヤース、拍子抜けしたように坐りこみ、

歌を謡だす。

その時、重そうなスニーカーを手に派手な

衣装女性のヴィクト現れる。

礼儀正しさか、興味をひかれるのか歌が終わ

るの待っている。

バリヤースの歌が終わる。

ヴィクト「……こんばんは」

バリヤース、驚いて、

「ワーオ！」

ヴィクトも驚いて、

「ワーオ！」

バリヤース「ああ、驚いた……」

ヴィクト「ごめんなさい」

バリヤース「(長い間見つめて) これはこれは。今日は何かび

つくりするようなことが起きると期待していたんだけ

ど……もう夜もふけたから駄目かと……やっぱ現れ

てくれた。感謝々々」

ヴィクト「あたし、現れたんじゃないんです……」

バリヤース「そんなこと言わないで……ただ残念なことに、お

知り合いじゃない。」

ヴィクト「お宅のドアが開いてたもんで……あたし、隣のナタ

ーシヤを探しているんですけど、どこに行ったか、ご存

じないですか？」

バリヤース「さあ、おとといはお隣さん。一晩中、叫び声にピ

ストルの音がしてた」

ヴィクト「ピストル？」

バリヤース「明け方になってみんなくたばたとみえ、静かにな

った」

ヴィクト「ご冗談を……何か、お疲れのご様子ですね」

バリヤース「ちよつともめ事があってね。しかし、バカなこと

をしたもんだ」

ヴィクト「何か？」

バリヤース「今日から休暇をとることにしちゃったんだ」

ヴィクト「あたしも今日から休みなんです」

バリヤース「偶然の一致。これはきつと仲良しになれるな……」

でもあなた、お伽の国の妖精じゃないんでしょうね？」

ヴィクト「とんでもない」

クリストが戻って来た風。

バリヤース「……お、クリスト」

ヴィクト「(クリストに) こんばんは」

バリヤース「お客さんだ」

ヴィクト、部屋の中を見渡して、

「わー、お人形さんがいっぱい……おもちゃを集めていら

っしゃるんですか？ 遅れました、わたしヴィクトシヤと

言います」

バリヤース「ヴィクトシヤ、よくいらした。わたしはバリヤー

ス。こちらはクリスト」

ヴィクト「どうぞよろしく。でも、ナターシヤは？ 困ったわ。

あたし、ナターシヤを探しているんです。あたし、レーニ

ングラードから飛行機で来たんです」

バリヤース「よかったです。見つけましょう。クリストすぐ管理人

に聞いてきてくれ」

クリスト、出て行く。

バリヤース「あのクリストは、ものすごく勤勉で、わたしにと

って大事な協力者でもある」

ヴィクト「どういうお仕事なんですか？」

バリヤース「人形作りです。ここにある人形はすべて二十五年

もつきあっているクリストの助けで、わたしが作ったもの

です」

ヴィクト「すてき、あたしも子どもの頃人形をたくさん持ってい

たわ。あたし、人形の服を縫うのが得意で……」

バリヤース「そう、それで、あなたのご職業は……」

ヴィクト「デザイナーです。数年前、短大のデザイナー・コースを出て、今レニングラードのデザイン・センターでアシスタントをしているんです。あたしの夢はパリやロンドンのデザイナーたちが、嫉妬するような、すごいデザイナーになることなんです。だから頑張らなくちゃ、あたしあまのじゃくだから、時々本当のこと言っちゃうんで……私生活ではぜんぜん運が無いんです」

クリスト、来る。

バリヤース「お、クリストどうだった？ ナターシャは？ 『何処へ行っちゃったって？』……行っちゃったって、何処へ？」

ヴィクト『お嫁に行っちゃった』？ うっそお！ ……ちよつと待ってよ！ 二週間前の手紙じゃナターシャ、決定的にフィアンセが嫌いだって言ってたけど？ ええ？ ナターシャはフィアンセとじゃなくて、フィアンセの親友と結婚したんですって……『素晴らしい結婚式で一晩中シャンパンを飲んで、朝になったら新婚旅行に……』出かけた？」

バリヤース「なある！ おとこの真夜中の銃声は、シャンパンを開ける音か」

ヴィクト「モスクワであたしがどこにも泊まるところがないって知っているくせに？ 今さら、レニングラードのに帰れないし……」

バリヤース「どうして？」

ヴィクト「あたし、逃げて来たんです」

バリヤース「逃げてきた？」

ヴィクト「明日、あたし結婚しなきゃならなかったの」

バリヤース「結婚式を？ ああ、強制的に結婚させられるところだったの？」

ヴィクト「ぜんぜん！ ただ、あのひと、あたしと一緒になっ



たら、しあわせになれないと思うの」

バリヤース「どうして？」

ヴィクト「彼とても頭がいいんです。彼といると自分が恐ろしく無知に思えて来るんです。あたしに対する気持ちも長続きするはずないと思うんです」

バリヤース「ま、結婚というものは一面、たしかに魅力的なところもあるが、その反面……（咳払い）ま、ヴィクトシヤ、よろしかったら今夜は隣の部屋に泊まって下さい。わたしは、いや、わたしとヴィクトはこのクッションで寝ますから」

ヴィクト「ご親切に」

F・O

F・I

クリストがエプロン姿でいる。

クリスト「ホッホー、バリヤースの奴、あの娘が来てから元氣満々だ、『いいかクリスト、今、俺は、ものすごい制作意欲にかられているんだ！ 今こそ、でっかい仕事が出来るといふ気がする。そこで、さっそくだが、俺たちは今日から作業に取りかかる。『美しきへレーネ』の人形作りだ！ 何ッ？ へレーネの人形はペーチキンが……作らしとけ！ 俺たちは俺たち自身の為にする、『美しきへレーネ』！ 女の魅力のすべて、その理想の姿を、人形に託す。いまだかつて、それを成しとげたのは、日本の文楽だけだ。ところが、今や、俺たちに順番がまわってきた！』だどさ……おッ、玄関でベルだ、どーぞーッ」

クジマー、クリストを見て、  
「ふうん……奇っ怪なながめだな」

クリスト「これから料理だ」

クジマー「一週間は、ボルガ河下りに行くって言ってたじゃない」

クリスト「気が変わった、陸の上で精神統一することにした」

クジマー「(意味ありげに) おやじ、いる？」

クリスト「寝てる」

クジマー「こんな時間に何で？」

クリスト「疲れて寝てんだ」

クジマー「ちょっと話がしたいんだ、起こして」

クリスト「明日にしよう、夜の七時、中央郵便局の前で、じゃ」

クジマー「どうして？」

クリスト「これから、水ギョーザを作るんだよ」

クジマー「水ギョーザ……こりや完全な精神分裂だ」

クジマー、バリエースのベッドルームへ行こう

とする。

クリスト「クジマー、ストップ！」

クジマー「ははあ……奴、一人じゃないんだな？」

クリスト「奴？ 奴は一人だ……」

クジマー「その目つきは、何か隠してる……白状しろ！ 何故、

ボルガ河下りに行かなかったんだ？」

クリスト「(慎重に) 仕事することにしたんだ。日本人をやっ

けなきや」

クジマー「日本人をやっつける？」

クリスト「わからないかなあ？ 『美しきヘレーネ』の人形を

作るんだ」

クジマー「えッ？」

クリスト「ペーチキンがいるっていうんだろ？ いいじゃない

か、こちららは、こちらでやるんだ」

クジマー「(ちよっとして) ペーチキンの話、あれ嘘だったんだ

……担当は、ペーチキンじゃない」

クリスト「嘘？」

クジマー「そう」

クリスト「じゃ誰？」

クジマー「わたし」

クリスト「ホンマ？（胸に手を当てて）衝撃の告白！（彼

を見て）そりゃよかった。こりゃ大成功だ！ じゃ、すぐ

に支配人のところへ行って、断わって来なさい」

クジマー「断る？」

クリスト「そう」

クジマー「どうして」

クリスト「クジマー、お前はまだ若い、すべてはこれからじゃ

ないか……だけどおやじさんにとっては、これが最後の仕

事になるかもしれない、一世一代だ」

クジマー「クリストおじさん、あんたはわたしを子どものころ

から知っている、何度とおやじとの間に入ってくれた。な

にしろ奴とは生まれた時から敵対関係にあるようなものだ

……未だ許せない！ とくに奴が女どもという時には、も

うカッカきちやう！」

クリスト「（隣室のドアを見て）クジマー、いい子だ、台所へ行

こう」

クジマー「どうして？」

クリスト「水ギョーザの作り方、教えてやろう」

クジマー「おしまいまで聞いてよ。わたしはおやじに勝たなく

ちゃならない。おぎやあと生まれた時から、そう決めたの

よ」

クリスト「何と早熟な?!」

クジマー「あのおやじは言った、『このガキヤア猿にそっくり

だ』って」

クリスト「何という驚愕的な記憶力?!」

クジマー「母から聞いたんだ」

クリスト「だろうな」

クジマー「わたしは奴の鼻をあかしてやる。絶対に勝って見せる！」

クリスト「野暮な説教するわけじゃないが、おやじさんの人生は残り少ない……後は自分で判断しなさい」

クジマー「……」

クジマー、帰ろうとしたところへ、パジャマ姿のヴィクトシヤが現れる。

クジマー「何だ？ 何だ？ 何だ？ 何だ？ どういうの、これ？」

ここで何してるんだ？」

ヴィクト「あたし？ 寝てたの……」

クジマー「よくもそんなことが出来たもんだ？」

ヴィクト「そんなことって？」

クジマー「もう、こうなったら、奴と話をつけるまでだ！」

と、ベッドルームへ駆け込むが、直ぐに戻って

来て、

「誰もいねえや」

ヴィクト「誰かいなきやいけないの？ 変な人……」

クジマー「あんたこそ、何だ、こんなとこ出入りして」

ヴィクト「何言ってるの、この子」

クジマー「この子？ ちくしょう！ お前の素姓はだいたいわ

かってんだ。あきれてものが言えないよ！ そんな罪のな

い顔をして、ある程度感じも良くて、優しそうで、何で、

何で！」

ヴィクト「どうなってるの？ そんな泣きそうな顔して、興奮

しないで、あなたは誰なの？」

クジマー「(悲嘆にくれて) どうでもいいじゃないか」

ヴィクト「じゃ、名前は何て言うの？」

クジマー「ええい！ 古臭くて変な名前だ、笑うなよ、クジマーってんだ」

ヴィクト「(即) いい名前じゃない！」

クジマー「(即) 本当？」

ヴィクト「やさしいお母さまだけが、そんな珍しくて女らしい名前を考えつくのよ」

クジマー「母じゃない、奴だ。あんたのバリエースニコフがつけたんだ」

ヴィクト「ちよつと待って……どうして、すぐに気がつかなかったのかしら……だって、あなた、そっくり！」

クリスト「……お、誰かドアをノックしている。どうぞ！」

男がスーツケースをさげて現れた風。

ヴィクト「(驚いて) リョーブ?! ええ、元気よ……ああ、ご

紹介します。私のフィアンセのリューブシカ。ようやく君を見つけて、ええ、わたしも大変うれしく思うわ」

リョーブ、クジマーに挨拶をした風。

クジマー「(戸惑うが) ああ、こんばんは……見かけによらず礼儀正しいひとみたいだ」

ヴィクト「リューブシカ……どうしてここがわかったの？ ナ

ターシャの右隣の部屋に居ると、管理人が教えてくれたんだ。『(リョーブに変身) その管理人によると、君は、ここにもう一周間も滞在しているそうだね』」

クジマー「(憤慨して) ちくしょう！ 奴め！」

リョーブ「(ヴィクトに) 始めのうちは君の失踪は、僕を驚愕させた。しかし、その後、僕は理解した。これは君の自我意識の自然発生的な表現にすぎないってことを。僕は君を愛している。僕は何も強制はしないし、何も要求しない。

だけど、忘れちゃいけないことは僕らの結婚式の為に、君のママがかなりの食料品を買い込んだわけだが、その一部

はずでに腐ってしまった。と同時に、残りの部分も、この一週間以内に完全に腐敗してしまうだろうということだ。

さて、君はここに、すでに二週間も住んでいたわけだが、僕の愛の力はこの試練にもたえることができる。まず、手始めに、存在するすべての見解を分類することにしよう。(クリストに) たとえば君。君の名は？」

クリスト「クリスト」

リヨーブ「(心から握手して) つまりわたしのヴィクトは、まさしくこの男と一週間過ごしたというわけだ」

クリスト「誤解だ、それは」

リヨーブ「いいや、ヴィクトのあなたに注がれてる目が私にそう感じさせる」

クリスト「いや、いや、いや、いや？」

リヨーブ「(友好的に、しかし高飛車に) 何はともあれ、あなたは僕が嫉妬しているなんて思っているんじゃないでしょうね。仮にもだ、君たちの間にある種の親密な関係が存在したとして、その関係が、非常に現実的ものだったと仮定してみよう。つまり……」

クリスト「いいかげんに、もう黙れ！」

リヨーブ「これだけは信じてもらいたいけど、僕は別にあなたを悪く思っているわけじゃない。しかし、あなたが僕のフィアンセと親密な関係にあったということを知って、感激の喜びにひたることができない。何？ ヴィクト、それは私の妄想だ、この人と君は何の関係もない、この家はもつと年上のバリエースさんの持ち物？ ははあ。ということは、君は自分のパートナーとして老人を選んだということか？ いいでしょう、統計的によれば、晩婚の成功率は、比較的に少ないということになっている。その上にだ、老人の恋のプログラムというのは、かなり制限をうける。彼らは、歌

を歌って聞かせたり、せいぜい良くて花をプレゼントするのがせきのやというわけだ……（玄関に花を持って立っているバリアースに気づく）おや、花屋さん、配達ですか、かなりお年を召しているのにご苦労なことです。（また、クリストに）一つ確かなことがある。かなりの確率から言って、老人の欲求不満には、根拠がないということだ……（バリアースに向き直り）『おい、いい加減にしろ……出て行け！』だ！ 花屋さん、そんな前後のわきまえもつかぬ程興奮してはいけません。人類が出現したのは、かつて、猿さちがいが気狂になったからだということをお忘れなく。我々は、近いうちにその逆の進化をしなければならぬということです。エッ、あなたがこの部屋の持ち主のバリアースさん?!（バリアースに握手をして）リョーブシカですヴィクトがお世話になりました……しかし、いまや世界は核兵器が充滿しています。それを爆発させないために、我々は完全に冷静であらねばならないのです。あなたが落ち着いた頃にまたお話を伺います。（グジマーに）君は気に入った、下の食料品店で待っているから、何か別のテーマでディスクションをしようじゃないか、じゃ失礼いたします」

リョーブ、一同にお辞儀をすると堂々と去る風で、リョーブ、ヴィクトに変身。

クリスト「クジマー、なにぐずぐずしてんだ！」

グジマー「何が？」

クリスト「何がじゃない！ 下であのてんかん野郎がまつてるんじゃないのか？ お前ら、ちようどお似合いだ」

クジマー「その前にちよつと説明してもらいたんだ」

クリスト「何だ？」

クジマー「この女が本当におやじと出来ているのか?!」

ヴィクト「女とはなによ！」

クジマー「願わくば、わたしがあんたを、母と呼ぶことになり  
ませんように……あんたのフィアンセと違ってわたしはち  
よつと古臭いところがあつて、愛だ恋だのつて言葉はまだ  
色あせちゃいないんです。このゲス女！」

グジマー、出て行く。

ヴィクト、バリヤースに近づき、

「バリヤースさん、お世話になってこんなこと言いたくは  
ないのですが、大変しつげが悪いようですね。これはあな  
たに大いに責任あるんじゃない？」

バリヤース、ヴィクトに花束を渡した風。

ヴィクト「……まあ、綺麗なお花……わたしに？」

F・O

F・I

クリストをクジマーがいる。

クリスト「で、何だ今日は？」

クジマー「賽さいは投げられた！」

クリスト「お前、劇団に人形のスケッチを持って行ったのか？」

クジマー「ああ、上手くいった、最高の出来だ。支配人も大喜

びだ、全ては決まった……奴はいるかい？」

クリスト「……古きアルバート街の散歩に出かけた」

クジマー「こんなどしや降りの雨の中を、ヴィクトーシャと

か？」

クリスト「彼女は、仕事上で、おやじさんに良い影響を与えて  
いる。あんなに楽しそうに、夢中になって仕事するのは久  
しぶりだ。情熱の炎で火事になっちゃったって感じだな。

ちよつと心配なくらいだ」

クジマー「ヴィクトと奴は上手くいってるみたいだな」



クリスト「ヴィクトーシャとはほとんど口も聞いていない、彼女の係りは俺ってわけだ。このどしゃ降りの中を散歩に出かけたのは、今朝仕事が終わったからだ。疲労困憊ひろうこんばいでぶっ倒れるところだった」

クジマー「完成したの……」

クリスト「ああ、見るか？」

クジマー「……」

クリスト、窓から外を覗き、

「お、帰って来た……」

クジマー「クリスト、決心した！ 今日は何もかもぶちまけてやる！」

クリスト「何を？」

クジマー「人形のことさ、わたしが勝ったことを劇団から聞いたら、奴はショックで死んじゃうかもしれないからな。わあし自身の口から言ってる」

クリスト「……ま、いいだろう。クジマー、おだやかにな」

クリスト、ドアを開けに行く。

バリヤースとヴィクトーシャが入ってくる。

ヴィクト、バリヤースに、

「バリヤース、あなたって水たまり跳び越すのうまいのね」

バリヤースがクジマーに声をかけた風。

クジマー「ああ、ちょっと寄ってみたんだ……あんたに話があるってね」

バリヤース、台所へ行く風。

クジマー「おい、話があるんだよ。台所へ隠れるのか？」

クジマー、ジッとバリヤースの去った方を見つめていたが、

クジマー「じゃ」

クリスト「どうした？」

クジマー「帰る」

ヴィクト「ちよつと待って、外は雨、みんなとお茶でも飲んで

雨の止むのを待つ……どう？」

クジマー「……」

クリスト「おやじさんな、お前が来てくれるの本当はうれしいんだよ」

ヴィクト「そうよ……それに、『今日は特別な日だから。俺様

が世界一のおいしい紅茶をいれてやる』って、クジマー、

お茶に付き合おうって……それと、『例のペーチキンはどう

してるかな、あの若き才能は？』って」

クジマー「ペーチキンは気になるんだ」

クリスト「『本当の所はな……』」

ヴィクト「お父さんね、『自分の娘がペーチキンなんかに出し

抜かれた』って、怒ってるのよ」

クジマー「まさか？」

ヴィクト「いいものを見せてあげる……ほら、あそこ……クリス

ト、布をとって」

クリスト「……よし」

クリスト、仕事台に近づき布をめくる。

ヴィクト「……どう、『美しきヘレーネ』」

ヴィクト、人形に近づく。

クリスト「素敵だろ……バリヤースの精神込めた作品だ」

ヴィクト「衣裳担当はあたし……可愛いでしょ……」

ヴィクト、人形に見入っていたが、

「……ちよつと待って？」

クリスト「どうした？」

ヴィクト「これ……クジマーじゃないの?!」

クリスト「……」

クジマー「……」

クジマー、人形に近づき凝視する。

みるみる顔が強張る……と、ドアに向かう。

クリスト「何処へ行くんだ？」

クジマー「ペーチキンに言ってやるの！ あいつなんか全然取るに足らないって……」

クジマー、去る。

クリストとヴィクト、クジマーが去った後を見つめている。

F・O

F・I

クリストが編み物をしている。

バリヤースが来た風。

クリスト「お早う、バリヤース……ああ、編み物さ、気なんか狂っちゃいない……頭の良い人に言わせると、精神統一には、これが良いらしい。ええ、ヴィクトーシャか？ 今朝は早起きして、人形を劇団の支配人に届けに行った……何でかな？ 『絶対そうするように』、ある人に言われたんだって……『誰？』かって（困って） ある人だ……秘密だ

……おッ、早速電話だ。（電話に出て）はい、こちらチャーリー・チャップリン（バリヤースに）奴だ、支配人！（電話へ）よし、そうか、分かった、分かった。人形は少しは気に入ったのかい？ えッ、（バリヤースに）最高の仕事だつてさ。（電話へ）そうか、連中は断ったのか？ ……分かった、バリヤースに伝えておく。明日劇場に行くよ、じゃ（電話を切って）バリヤース、あんたは無尽蔵の才能があるつてさ……そうだ、お前さんの言ったとおりだ。おッ、ノックだ？」

クリス、玄関へ立つ。

クリスト「ああ、分かっているよ。良い感じの奴しかいれないよ」

クリスト、来る。

クリスト「クジマーだ」

クジマー、現れる。

クジマー、無言でバリヤースの前に佇む。

クリスト「……おい、どうした？」

クジマー「……おめでとう、『美しきヘレーネ』」

クリスト「……他に言いたいことがあるんだろ」

クジマー「……わたしここに越してきていい……おやし殿の

『美しきヘレーネ』の仕事を手伝いたいの」

バリヤース、頷いた様だ。

クリスト「……クジマー良かったな」

バリヤース、クリストに近づいた風。

クリスト「……え、何だよ、耳を貸せっつか、（クリスト舞台

前に出る）くすぐつたいな、（バリヤースが耳打ちしている

風）何だよ、早くいえよ……えっ、ある人ってクジマーか

わっ……そんなことはどうでもいいよ……。ああ、ヴィク

トシャか、ヴィクトはもうここには帰ってこないよ。彼女

は今頃、フィアンセと飛行機の中さ……あんたがいったよ

うに彼女はやはり不思議の国の妖精だったんだ」

冠

2017.10.15.sun